# シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(4)
## —シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901年～1902年—

小　柳　正　司

(2002年10月15日　受理)

# Some Inspections of the Correspondence of John Dewey During His Chicago Years (4)
## — On Some Events about the University of Chicago Laboratory School : 1901－1902—

KOYANAGI　Masashi

## Abstract

The purpose of this paper is to examine John Dewey's correspondence during his Chicago years, especially from the beginning of 1901 to May 1902, focusing on his activities concerning the University of Chicago Laboratory School.

In March 1901, it was officially decided that the Chicago Institute of Pedagogy and Arts, under the directorship of Francis W. Parker, would be incorporated into the University of Chicago as the University of Chicago School of Education. Consequently, it was one of the most urgent problems for the Dewey's Laboratory School whether it would be merged with the elementary school of Chicago Institute.

In this paper, I intend to point out that Dewey was inconsistent as to his judgment about the merger of his elementary school (the Laboratory School) with Parker's elementary school. He approved at first the arrangements between the Chicago Institute and the University, according to which Parker would be in charge of elementary education and Dewey would be in charge of secondary education, so that Dewey's elementary school would be absorbed into Parker's elementary school. It is clear that after 1900, when *The Elementary School Record*, a series of twelve monographs of the Laboratory School, was published, Dewey became more interested in secondary education than in elementary education. However, when the Parents' Association of the Laboratory School strongly opposed the merger of the two elementary schools, so did

Dewey. Most of the parents did not want their children to be educated in the practice school of normal school; they preferred the university experimental school. Then Dewey emphasized the significance of the Laboratory School for scientific research into education. In the event, the Laboratory School was continued.

## はじめに

1899－1900年度は，シカゴ大学実験学校にとって大きな意味をもつ年であったように思われる。1899年11月にはデューイの『学校と社会』が出版され，1900年２月から12月にかけては『小学校記録』全９冊が逐次刊行された。これらによってシカゴ大学実験学校は，理論的にも実践的にもほぼ完成された姿を公にすることになったのである。

他方，デューイを主任教授とする教育学科の体制も，ほぼこの頃に，名実ともに完成した。1899年の秋学期からはジョージ・ハーバート・ロックが中等教育担当の専任講師として着任し（翌年から助教授），続く1900年の冬学期にデューイと対立関係にあったバルクリー准教授が退職し，1900年の夏学期からはエラ・フラッグ・ヤングが教育学准教授に着任した（秋学期からは教授）。ヤングは，実験学校の主事（director）も兼務した。さらに，1900年の秋学期からは，コールビー・カレッジ（Colby College）学長のナサニエル・バトラー（Nathaniel Butler）が教育学教授としてシカゴ大学に着任することになった[1]。こうして，1900－1901年度には，教育学科には哲学科主任教授を兼務するデューイを含めて４人の専任教員が確保された。なお，シカゴ大学の『年次記録』には，1900－1901年度から1902－1903年度まで，教育学助教授としてトマス・ベイリー（Thomas P. Bailey）の名が出ているが，授業担当の記載がない[2]。彼を含めれば，教育学科は５人の専任教員の体制になったことになる[3]。

こうして，デューイが着任当初から思い描いてきたような，実験学校を核とするシカゴ大学教育

---

[1] William Rainey Harper to John Dewey, August 13, 1900.

[2] *The Annual Register, The University of Chicago : July* 1900-*July* 1901 (Chicago : The University of Chicago Press, 1902), pp. 179-181; *The Annual Register, The University of Chicago : July* 1901-*July* 1902 (Chicago : The University of Chicago Press, 1903), pp. 187, 192-193; *The Annual Register, The University of Chicago : July* 1902-*July* 1903 (Chicago : The University of Chicago Press, 1904), pp. 211, 217-219.

[3] なお，デューイは1900年２月３日付のハーパー学長宛の手紙で，教育学の助手の採用を求め、卒業生のヘンリー・ピーターソン(Henry Peterson)の採用を打診している。おそらくは，ヤングの下で助手をさせるつもりであったのであろう，ピーターソンは実験学校の仕事も兼務できる人物だと書いている。John Dewey to William Rainey Harper, February 3 , 1900. しかし、ピーターソンの採用は実現しなかった。その後デューイは，1900年10月４日付のフランク・マニー宛の手紙でも，大学と実験学校を兼務できる人材が欲しいのだが，だれか有能な人はいないかと問いあわせている。John Dewey to Frank A. Manny, October 4 , 1900.

学科の体制は，1900－1901年度にいたってようやく実現されたと言えるだろう。

ところが，1901年３月にフランシス・パーカーが率いるシカゴ教員養成学院（The Chicago Institute of Pedagogy and Arts）がシカゴ大学教育学部（The University of Chicago School of Education）としてシカゴ大学に併合されることが正式に決まった。そして，パーカーの教育学部は初等教員養成を，デューイの教育学科は教育専門職養成と中等教員養成を担うという体制がとられることになった。しかし，両者の間にはいくつかの微妙な問題が発生し，とりわけ，デューイの実験学校は存廃の危機に瀕することになった。

さらに，1902年３月にパーカーが死去したため，後任の教育学部長にデューイが就任し，ついに1902年10月からは，実験学校は教育学部の附属小学校に吸収されることになった。新しい附属小学校の校長にはデューイ夫人のアリスが就任したが，アリスと旧シカゴ学院系の教師たちとの間は関係がうまくいかなかった。また，教育学部の運営をめぐって学部長（director）のデューイと主監（dean）のウィルバー・ジャックマン（Wilbur S. Jackman）との間にも数多くの行き違いが生じた。そうした中で，ハーパー学長がデューイ夫人の校長職は1902－03年度限りという通告を一方的におこなってきたことを直接のきっかけとして，デューイは教育学部長職を辞し，さらには哲学科主任教授も辞職して，シカゴ大学を去ることになったのである。

デューイがシカゴ大学を辞職するに至る経緯については，ロバート・マッコール（Robert L. McCaul）がデューイやハーパー学長，その他の関係者の書簡を詳細に分析して跡付けた研究がある[4]。本稿は，その追試と言えるものである。ただし，マッコールの研究は40年以上も前のものであり，その後明らかにされた資料や書簡も少なからずある。本稿では，これらの資料や書簡も踏まえて，より総合的な見地から，シカゴ大学時代後半期のデューイと実験学校をめぐる諸動向を跡づけることにしたい。

## １．シカゴ学院の併合

シカゴ学院は，シカゴの資産家であるアニタ・マコーミック・ブレイン（Anita McCormic Blaine）がフランシス・パーカーのために100万ドルを拠出して設立した私立の教員養成学校である。ちなみに，アニタ・マコーミック・ブレインはマコーミック刈取機会社の創立者で大富豪のサイラス・マコーミック（Syrus Hall McCormick）の息女である。

---

[4] Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago, Part I : July 1894-March 1902," *School and Society*, March 25, 1961, pp. 152-157; Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago, Part II : April 1902-May 1903," *School and Society*, April 8, 1961, pp. 179-183; Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago, Part III: September 1903-June 1904," *School and Society*, April 22, 1961, pp. 202-206.

もともとパーカーは，1883年以来クック郡師範学校（Cook County Normal School）の校長を勤めていたが，1896年１月にクック師範学校がシカゴ市に移管されて，シカゴ師範学校（Chicago Normal School）となった時から，学校の運営をめぐってパーカーは毎年のようにシカゴ市の保守的な政治家たちと対立を繰り返し，思うように教員養成をおこなうことができなくなっていた。パーカーの熱烈な支援者であったブレイン夫人は，彼を政治的制約から解き放ち，彼の理想とする教員養成に専念させるために，シカゴ学院の設立をパーカーに申し出たのであった[5]。

1899年６月，パーカーと彼に従うシカゴ師範学校の大部分の教員スタッフは辞職し，そのままシカゴ学院に移った。敷地として，ブレイン夫人の100万ドルの資金から，シカゴ市北部のウェブスター街330番地（330 Webster Avenue）に土地が45万ドルで購入された。そして，近くのウェルズ通り（Wells Street）に建つビルディングを借りて仮校舎とし，10月７日に開校した[6]。ただし，最初の１年間は教員スタッフに有給休暇が与えられ，アメリカ各地やヨーロッパの大学に研修に出かけたようである[7]。

1900年４月に校舎建設の入札がおこなわれた。しかし，３つの業者の付値はいずれも50万ドルを越え，当初の予定額の30万ドルを大幅に上回ったので，校舎建設はしばらく見あわせることになった。そして，建築計画が見直され，パーカーが望んでいた広い集会室は縮小され，図書室も削られ，実験室は除外されることになった[8]。

## シカゴ学院の校舎計画へのアドバイス

既にデューイは，1899年４月の段階でブレイン夫人のシカゴ学院の構想について，あまり関わりあいになりたくないという考えを述べていた[9]。しかし，1900年７月，彼はブレイン夫人からシカゴ学院の校舎建築について相談を受けていたようである。デューイは，７月18日から27日まで

---

[5] Nellie Lucy Griffiths, "A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago,"unpublished M.A. dissertation, The University of Chicago, 1927, p. 102.

[6] 松村将『シカゴの新学校』法律文化社，1994年，119，121頁参照．シカゴ学院は1901年にシカゴ大学に併合されて，シカゴ大学教育学部となり、市南部に位置するシカゴ大学のキャンパスに隣接した土地にエモンズ・ブレイン・ホールを建設してそこに入った。市北部のウェブスター街330番地の敷地には，シカゴ大学教育学部の姉妹校としてフランシス・ウェイランド・パーカー・スクールが建設され，現在もそこにある。ただし，この学校はシカゴ大学とは別個の独立した学校であった。

[7] Ida B. DePencier, *The History of Laboratory Schools: The University of Chicago* 1896-1965 (Chicago: Quadrangle Books, 1967), p. 40; Woody Thomas White, "The Study of Education at the University of Chicago, 1892-1958," unpublished Ph.D. dissertation, The University of Chicago, 1977. p. 59.

[8] Woody Thomas White, "The Study of Education at the University of Chicago," unpublished Ph.D. dissertation, The University of Chicago, 1977, p. 77. 建築計画の見直しは，1900年４月21日のシカゴ学院理事会で決定された。

[9] John Dewey to Jane Addams, April 26, 1899. また，次も参照．John Dewey to Frank A. Manny, July 26, 1899.

ニューヨーク州シャトーカに滞在していたが，その間，ブレイン夫人に宛て手紙と電報を何度も出して連絡をとっている。

デューイは，シャトーカに向かう直前の7月11日に次女のジェーンが誕生した関係で，妻アリスとジェーンをシカゴにおき，他の子どもたちをニューヨーク州ハリケーンの山荘において，シャトーカに来ていた。7月19日付のブレイン夫人宛ての手紙でデューイは，妻の体調がよければ妻と赤ん坊を連れてニューヨーク州ハリケーンの山荘に行く予定だが，妻の体調がおもわしくなければ，7月30日から8月4日の都合のよい日にブレイン夫人のところを訪ねたいと書いている――たぶん彼は一旦シカゴに戻るつもりだったのであろう[10]。

しかし，翌日の7月20日付の手紙で，デューイはやはり妻と赤ん坊を東部［ニューヨーク州ハリケーンの山荘］に連れいてくことにしたいので，ブレイン夫人が自分に求めている判断の要点を文書で回答することにしてはいけないかと書いている。そして，建物の計画は既に充分に練られており，現時点で自分に特別なアイデアがあるわけではないとしながらも，自分はシカゴ学院に深い関心をもっているので，役に立つことなら何でもすると書いている[11]。同じ7月20日付でデューイはブレイン夫人に，「7月と8月はずっと東部にいるので，貴女の質問リストに手紙で答えてはいけませんか」と電報を打っている[12]。

ところが，翌日の7月21日付の手紙でデューイは，妻アリスから8月の第1週の週末までは東部に行けないと連絡が来たので，一旦シカゴに戻って直接妻の様子を見ることにしたいが，その時までブレイン夫人がシカゴにおられるなら，ぜひ会ってお話ししたいと書き送っている[13]。同日，電報でも「できることは何でもしますが，帰宅するまでははっきりしません」と書き送っている[14]。そして，7月23日に，「30日月曜日，貴女の都合のよい場所と時間で」と電報を打っている[15]。

デューイとブレイン夫人がシカゴで直接会って話しをしたかどうかは不明である。デューイは，8月2日付でブレイン夫人に手紙を書き，シカゴ学院の校舎計画に対する自分の意見を箇条書きにして送っている。彼の意見は，当然のことながら，実験学校での諸経験をふまえたものとなっている。

1．3つの独立の実験室を造ることはやめて，普通教室を広めに造るか，実験室と普通教室を間接的な形でつなげて造るようにしたらよいと思います。たぶん，第1段階の計画は小学校段階となり，第2段階の計画で中等段階が扱われることになるでしょう。私は，小学校と幼稚園の段階の子どもたちは，調理テーブ

---

10) John Dewey to Anita McCormick Blaine, July 19, 1900.
11) John Dewey to Anita McCormick Blaine, July 20, 1900.
12) John Dewey to Anita McCormick Blaine, telegram, July 20, 1900.
13) John Dewey to Anita McCormick Blaine, July 21, 1900.
14) John Dewey to Anita McCormick Blaine, telegram, July 21, 1900.
15) John Dewey to Anita McCormick Blaine, telegram, July 23, 1900.

ル，作業台，および科学研究の場所を，自分たちの教室にもつか，教室と隣接する部屋にもつべきだと考えています。(この場合，一部屋を3ないし4学年で使用し，小学校段階の料理，裁縫，機織り，科学器具の使用はすべてそこで対応できるでしょう。この段階では，科学をいくつもの分野に分ける必要はありません。) もし普通教室で対応するのならば，部屋の広さをどれくらい取ったらよいかはクック嬢 (Flora J. Cooke) が知っているはずです。

2．できることなら，物理実験室と化学実験室は隣どうしにし，それに加えて共通の講義室を設けるべきだと思います。

3．生物室と地理室も近接させたほうがよいでしょう。

4．臭いの問題を考えれば，台所は地下にもっていき，食堂と家庭科室は便宜を考えて1階に置き，しかも玄関ルームとつなげれば，子どもたちに社交の機会を与える場とすることができるでしょう。

5．私は，なぜ「台所」をわざわざ家庭科室から離れたところに造るのか，理由がわかりません。

6．図書室はもっと広くするべきです。書架のスペースを取るためではなく，テーブルを置くスペースを取るためです。この部屋はおのずから，教員養成課程の学生が勉強する部屋になるでしょうし，一部の附属ハイスクールの生徒も使うでしょう。ですから，部屋の大きさは一度に多数の人間が利用できるように計画するべきです。

7．私は，もう少し詳細がわかれば，ハイスクール (たぶん第8学年も含む) に集会室と，さらにはいくつかの小さな復唱室を設けることについて，問題を提起したいと思います。私は，後者の必要に充分応えるだけの余裕は今はないだろうと思います。この程度の集会室 (机を備えた) があれば，復唱室用のスペースを節約することは可能でしょう[16]。

デューイの意見がどの程度取り入れられたかはまったく不明である。しかし，ニューヨーク州ハリケーンの彼のもとにはその後，ブレイン夫人およびシカゴ学院理事会から彼の協力に感謝する丁重な礼状が届いたようである[17]。それはともかく，こうしてシカゴ学院の新校舎が市北部のウェブスター街330番地に建設されることになった。

## シカゴ学院の編入問題

シカゴ学院の校舎建設がはじまった後，1900年12月にシカゴ大学のハーパー学長は，シカゴ学院をまるごとシカゴ大学教育学部 (The University of Chicago School of Education) として大学に編入したいという申し出をおこなった。ハーパー学長のねらいは，シカゴ学院にシカゴ大学のプレステージを供与することを見返りに，ブレイン夫人の100万ドルを使って，シカゴ大学に教員養成学部 (teachers college) を造営することであった。

---

[16] John Dewey to Anita McCormick Blaine, August 2, 1900.

[17] John Dewey to Anita McCormick Blaine, August 22, 1900.

編入についての交渉が進む中で，デューイは，シカゴ学院が編入された場合の新たな組織体制について，1901年1月31日に，ハーパー学長に次のような原案を書き送っている。

1．教育学部（School of Pedagogy）と教育学科（Department of Education）は，協力関係をもちながらも，組織管理上，2つの独立の組織とすべきである。

2．教育学部について

ⓐひき続きパーカー氏の指導のもとにおかれる。

ⓑ教育学部の各科（departments）の長と，大学の各学科の代表者のうちからパーカー氏が任命する数名とによって，教授会（faculty）を組織する。

ⓒパーカー氏のもとに教員会議（teachers' conference）を設置する。

ⓓ教員養成のための小学校を運営する。

または

ⓓ教員養成のための初等・中等学校を運営する。（以下の3ⓔが採用されなかった場合）

3．教育学科について

ⓐひき続きデューイ氏の指導のもとにおかれる。

ⓑ教育学部の学生も受講できる科目を大学で開講する。

ⓒ大学の他の諸学科と同じ立場で教育学部の教育に協力する。

ⓓ大学の他の諸学科と共同で教育学部の支援要請に応じる。

ⓔ実験目的を主とする中等学校を運営する。

または

ⓔ現在運営している小学校を，教育学部の小学校と同じ建物で，実験目的のために継続する。ただし，以下の条件による。

1）2年を越えて継続しない。

2）欠員の補充以外に新たな生徒を受け入れない。

3）生徒数は全体で120人を超えない。

4）授業料収入よりも1,000ドルを超えた経費（教室の使用などは含まない）については，外部の寄付によって賄う。

5）建物内での両小学校の一般的秩序は，学科と学部の双方が協力して作成するルールに基づいて維持される[18]。

デューイは，シカゴ学院が教育学部として大学に編入されても，大学の教育学科はそれに吸収されないこと，両者は協力関係をもちながらも，一方の教育学部は初等教員養成を，他方の教育学科

---

[18] John Dewey to William Rainey Harper, January 31, 1901.

は中等教員および教育専門職の養成を目的とし，それぞれ独立の組織として維持されることを提案している。ここで興味深いのは，デューイが教育学科に実験用の中等学校の設置を提案していることである。そして，教育学科の実験学校（小学校）についてはパーカーの教育学部の小学校と同じ建物に入り，２年後をめどに解消することを提案していることである。おそらく彼としては，実験学校での教育実験の中心を，それまでの初等段階から，今後は中等段階へと移行させることを考えていたのであろう。

翌日の２月１日，シカゴ学院側からフランシス・パーカーとウィルバー・ジャックマン，大学側からハーパー学長とデューイの４人が出席して，合意文書に署名した。その内容は，シカゴ学院は教員養成課程（College of Education）と附属実習校からなるシカゴ大学教育学部（The University of Chicago School of Education）となり，パーカーを学部長（director）とすること，デューイはひき続き教育学科を指導し，さらには，既に大学に編入されていたサウス・サイド・アカデミー（South Side Academy）とシカゴ手工学校（Chicago Manual Training School）の２つの中等学校の指導も引き受けること，そしてシカゴ大学出版から発行されている中等教育専門雑誌の『スクール・レヴュー』（School Review）についても彼が編集責任を負うというものであった[19]。つまり，初等教育はパーカー，中等教育はデューイという住み分けが確認されたわけである。

２月５日，シカゴ学院の理事会はシカゴ大学の理事会に対して，次のような通知を送り，ブレイン夫人の100万ドルの資金を委譲することを認めた。

> ここ３～４週間，私たちはハーパー学長と直接お会いしたり手紙をやり取りしながら，私たちがこれまでおこなってきた事業，すなわちフランシス・W・パーカー大佐が以前，ノーマル・パークで取り組んだ学校［シカゴ師範学校］を受け継いだ教員養成学校（pedagogic school）と小学校を，シカゴ大学に移管する問題を検討してきました。ハーパー学長との交渉の中で，私たちは貴理事会に対して一つの申し入れをおこないましたが，それは条件に合わないということで，ハーパー学長は貴理事会に報告しなかったのだと思います。
>
> 私たちは，もっか，以下のような提案をいたしたいと思います。すなわち，大学に約１００万ドル相当の財産を委譲しますが，その内容は以下のとおりです。
>
> a）未利用の不動産。これには，1899年に42万5,000ドルが支払われています。
>
> b）学校の設備および建物。これには，７万5,000ドル余りがかかっています。
>
> c）50万ドル相当の有価証券。ただし，大学に編入される教員養成機関（Pedagogical Institute）のために，この資産が私たちの考えている目的にそって使われ，それ以上に望ましいことはないと

---

[19] White, op. cit., p. 78.

[20] Cited from, Griffiths, op. cit., pp. 107-108.

貴理事会がお考えになることが条件です[20]。

上の文書中で「ハーパー学長との交渉の中で，私たちは貴理事会に対して一つの申し入れをおこないましたが，それは条件に合わないということで，ハーパー学長は貴理事会に報告しなかったのだと思います」とあるのは，シカゴ学院側からハーパー学長に，シカゴ大学の方でも新しい教育学部のために100万ドルの資金を用意するようにという申し入れをおこなったけれども，ハーパー学長がそれを受け入れなかったことを意味している。

翌2月6日，シカゴ学院理事会はシカゴ大学理事会と次のような合意文書を交わした。

過去6週間におよぶ交渉の結果，シカゴ学院をシカゴ大学に併合することが決定された。この合併は，両機関に多大の利益がもたらされることを慎重に考慮したうえでなされた。

ここ1年ほどの間，シカゴ大学は教育学科の拡充計画を練ってきた。そのため，デューイ実験学校で現在おこなわれている初等教育に加えて，中等教育も開始する準備をすすめてきた。資金が確保され次第，すみやかに大学の他の諸学科に隣接する土地に新しい建物を建てて，これら2つの学校を収容するつもりであった。

……(途中，欠落)……

専門学部（Professional School）［教員養成課程］に加えて，幼稚園からハイスクールに至る全段階の一貫校を大学に設立し，維持することにする。この学校は，1つの目的のもとに2つの部門，すなわち初等部門と中等部門を組織することとする。前者はパーカー大佐の指揮下におかれ，後者はデューイ博士の指揮下におかれ，彼は現在の小学校の監督を放棄する。現在，デューイ博士は教員養成に直接関係することよりも，中等部門の実験に多大の関心をもっているので，専門学部は学部長（Director）のパーカー大佐の指揮下におかれ，当面は一貫校の初等部門を付属小学校とする。しかしながら，中等教員養成のコースも可及的すみやかに確立し，最終的には，中等学校およびカレッジの教師をめざす現職教員が観察と研究と訓練の機会を得る全米で最もすぐれた場所にするつもりである[21]。

この合意文書にあるように，シカゴ学院の編入は，デューイとハーパー学長が以前から構想していた教育学科の拡充計画に連動するものだった。彼らは，シカゴ大学に実験用の初等・中等一貫校を付設して，シカゴ大学そのものを公教育制度全般の頂点に位置する一大教育センターにすることを考えていた。そして，教育学科は，大学の各学科における学問研究と，一貫校における初等・中等教育とをつなぐ機能を果たすべく，組織の拡充がデューイとハーパー学長の間で話し合われていたのである。既にデューイは，1899年刊行の『学校と社会』および1900年発行の『小学校記録』全9冊によって，初等教育段階の教育実験は終了したと考えており，これ以降は中等教育段階の実験に関心を移していた。他方，シカゴ大学は既に1896年にシカゴ手工学校をシカゴ大学に編入し，さ

---

[21] Chicago Institute & University of Chicago to To Whom it may concern, February 6, 1901.

らにそれまでシカゴ大学の提携校であったサウス・サイド・アカデミーを大学に直接編入して，これらをデューイの実験学校と合わせて一つの初等・中等一貫校とし，建物を大学のキャンパスに隣接する土地に建てる計画でいた。この計画に，ハーパー学長はシカゴ学院の編入を組み入れ，こうしてシカゴ大学は，初等教員養成で全国的に名声の高いパーカーと，実験学校およびその実践を紹介した『学校と社会』で革新的な教育理論家として一躍有名になったデューイとを擁して，まさに全米一の教育研究センターたらんとしたのである。

2月9日，パーカーはデューイに手紙を書き，教育学部の組織案について説明した[22]。それによると，教育学部（School of Education）は初等学校（Elementary School）と教員養成課程（Pedagogic School）とからなり，初等学校は幼稚園から第8学年までの9クラスとし，生徒は各クラス30名，全体で270名，教員は各学年に一人，これに幼稚園の補助教員および校長を加えて合計11人とする。教員養成部は学生250人，教員は各科に分かれ，「教育哲学」2人，「理科」3人，「歴史・文学」1人，「地理・地学」1人，「数学・天文」1人，「芸術」2人，「発話・音読」1人，「音楽」1人，「家政」2人，「言語」4人（英語，独語，仏語，ギリシア・ラテン語），「体育」2人，「幼稚園」1人，「手工」2人，「図書室」2人，「博物室」1人，合計26人，初等学校と教員養成部を合わせて，教育学部全体で教員数は37名とする。そして，教員養成部の教員は全員，初等学校の指導主事（supervisor）または教員を兼ねることとする。このように概略を説明した後，パーカーはシカゴ学院の教員スタッフの名前を一人一人挙げながら，採用の可否および配置する部署を説明している。こうした説明に付して，パーカーはデューイに次のような要望を述べている。

> 以前にも申し上げたように，私は初等学校を担当するので，貴殿には中等学校を担当していただきたい。そして，貴殿が信頼しない教師は初等学校でも教育学部でも一人も採用しないでいただきたい。さらに，人事の相互交流を図ることによって，きわめて効果的かつ経済的に仕事を進めることができるでしょう。教育学部と初等学校の教員たちに求められる時間に関して重要な問題があります――すなわち，これらの教員たちは中等学校でも教える時間があるかどうかということです。これに関連して，貴殿が中等学校の教員を選ぶ際には，教員養成部と初等学校でも教えられる有能な教員を選んでいただき，人事交流によって全体が効率を増すようになることを私としては希望します。
>
> 私は教員の評価についてはとりわけ公正を期したし，長い年月をかけて選りすぐりの教員集団を作り上げてきたことは貴殿も御承知でしょう。彼らの最もすぐれている点は，学ぼうとする姿勢であり，教育の最も熱心な研究者であることです。彼らは，私から学ぶのと同様に貴殿からも学ぼうとしており，私の理論と同様にあなたの理論にも導かれたいと思っています。……
>
> 私たちは，私が概略を示した初等学校と教員養成課程を組織することから始めたいと思うので，生徒数から見て教員全員を雇用するわけにはいかない。そこで，初等学校と教員養成部の教員を中等学校で

---

[22] Francis W. Parker to John Dewey, February 9, 1901.

も教えるようにして，効率化を図ることはできないだろうか。初等学校の多くの教員は教員養成部と中等学校でもりっぱに教える力があります。……[23]

パーカーのこのような人事交流の要望に対して，デューイは2月15日付でパーカーに手紙を書き，次のように答えている。

私が貴兄の教員集団をあまり高く評価していないという印象をお持ちになって，少々がっかりされたと学長にお話になったことを学長からお聞きしました。人事交流の提案によってこの件は晴れたものと思っていました。実は中等学校のスタッフについてはまだ検討中なので，あのようにはっきりしたことが言えなかったのです。こちらでまだ名前すらあがっていない人たちを前もって貴兄に御承知いただくことなど考えてもみませんでした。選抜が済むまでお待ちいただき，それから貴兄御自身に判断していただくほうがよいと考えていました。それで，人事交流の一般原則だけを決めておいて，5,000ドルはそれを円滑に実施に移すための費用としてとっておき，具体的な人選と少なくとも一時的な実施プログラムの作成は，詳細が決まるまで待つのが最善だと考えていました。

私は，貴兄の教員集団からお手伝いいただける機会を心から期待しております[24]。

パーカーとデューイの間で教員人事についてなかなか興味深いやりとりがあったことがうかがえる。おそらくデューイにしてみれば，シカゴ大学の附属中等学校もやはり中等教育の実験学校であるべきで，そこの教員は中等カリキュラムの研究開発に携わり中等教育の実験研究を担えるだけの専門性の高い教員でなければならなかったはずである。それなのに，小学校教員養成に携わっているシカゴ学院の教員たちの中から中等学校の授業も担当できる者を採用して欲しいというパーカーの申し出は，あまりにも便宜的で，附属中等学校の役割を軽視した申し出であり，にわかには同意できないというのがデューイの正直な気持ちであったろう。

### シカゴ学院での合併問題の検討

先に2月6日にシカゴ大学理事会とシカゴ学院理事会の間で合併についての合意文書が交わされたが，シカゴ学院の教員スタッフの間では，なおも合併の可否について検討がおこなわれた。学院長（president）のフランシス・パーカーは，合併を受け入れるかどうかを教員スタッフに諮った。パーカーと彼の教員スタッフにとって最大の不安は，大学に編入されることで，これまで培ってきた教育上の独立性が保てなくなるのではないかという点にあった。ハーパー学長は，シカゴ学院側の不安を解消するために，教育・研究の自由と，さらには大学の各学科による支援をパーカーに文

---

[23] Ibid.

[24] John Dewey to Francis W. Parker, February 15, 1901.

書で約束した。さらにハーパー学長の要請によって，シカゴ大学の教授たちもパーカーに次々と手紙を書き，パーカーの業績に対する理解と協力の態度を示した。シカゴ学院の教員であったゾニア・ベイバー（Miss Zonia Baber）は，この時の議論の経過について，後年次のように回想している。

> パーカー大佐は提案を学院の教員スタッフに諮った。私たちは教員会議を何回か――3回だったと思う――開いてこの問題を議論した。主たる問題は教育上の独立性だった。教育の実験的な取り組みが大規模大学の慣行によって阻害されるのではないかという不安があった。しかし，サリスバリー（Salisbury），チェンバリン（Chamberlin），スモール（Small）その他の教授たちからの手紙によって，附属小学校がうまく受け入れてもらえないのではないかというパーカー大佐の不安は解消された[25]。

同じくシカゴ学院の教員であったジョージ・メイヤーズ（George William Myers）も，同様の回想をおこなっている。

> 大学との合併の提案が検討されていたとき，彼（パーカー大佐）はチェンバリン，コールター（Coulter），サリスバリー，スモール，副学長のジャドソン（Judson），その他の教授たちから手紙を受け取った。これらの人たちは手紙の中で，新しい教育学部に対する彼らの理想と立場を説明していた。これらの手紙によって，パーカー大佐はすぐれた教員養成機関の目的について，彼らがどのような考えをもっているかを知ることができたと判断した。彼は言った，「これらの人たちは度量が大きいので，われわれがやることにいちいち干渉はしないだろう。彼らは開放的だ。」彼はその精神を信じ，教員スタッフにもそれを信じるように求めた[26]。

だが，シカゴ学院の教員スタッフの間では，なおもブレイン夫人の100万ドルの行方について議論がおこなわれた。ブレイン夫人とパーカーは，シカゴ大学の側からも100万ドルの資金を用意するようにハーパー学長に求めた。しかし，ハーパー学長はそれを認めず，ただ赤字分についてだけ

---

[25] Zonia Baber, personal interview, January 18, 1927, cited from Nellie Lucy Griffiths, "A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago," unpublished M.A. dissertation, The University of Chicago, 1927, p. 104. サリスバリー（Rollin D. Salisbury）はシカゴ大学の自然地理学教授，チェンバリン（Thomas Chrowder Chamberlin）はシカゴ大学地質学主任教授，スモール（Albion Woodbury Small）はシカゴ大学社会学主任教授である。彼らはいずれもデューイの実験学校の理解者であり，協力者でもあり，教育に深い関心をもっていた。

[26] George M. Myers, personal interview, January 19, 1927, cited from Griffiths, op. cit., p. 104. コールター（John Merle Coulter）はシカゴ大学植物学主任教授で，デューイの実験学校の理解者であり，協力者でもあった。ジャドソン（Harry Pratt Judson）はシカゴ大学政治学主任教授で，大学院長（Dean of the Faculties of Arts, Literature, and Science）であった。

[27] White, op. cit., p. 77.

大学側で補填することを約束した[27]。さらに，シカゴ学院ではパーカーをはじめ教員スタッフは，一般の師範学校の教員に比べると破格の待遇を得ていたが，シカゴ大学に移ることで，潤沢な資金とともに，こうした自分たちの恵まれた待遇も失われてしまうことが予想された[28]。この点について，同じくシカゴ学院の教員であったキャサリン・スティルウェル（Miss Katharine M. Stilwell）が次のように回想している。

> パーカー大佐は，教員スタッフに決定を求めた。彼はこう言った。「私は年をとりすぎているので，教員スタッフなしでは進むことができない。問題は，諸君がどこでこの資金を最も有効に用いることができるかだ。」このようにして，彼は私たちを厳格に利他的な立場に立たせた。実際に，教員スタッフはパーカー大佐と一緒に大学に移ることを投票で決定し，給与の減額も受け入れた[29]。

1901年２月15日，シカゴ学院の教員会議はシカゴ大学との合併を投票により決定した。ブレイン夫人の100万ドルはシカゴ学院と一緒にシカゴ大学に移ることが同意された。それとともに，教員スタッフは，自分たちの給与が減少することも承諾した。

**正式合意**

1901年３月１日，ハーパー学長は，会計担当理事のハッチンソン（Charles Laurence Hutchinson）とともにニューヨークのジョンD. ロックフェラー（John Davidson Rockfeller）のもとに行き，シカゴ学院との合併に関する大学理事会の決定を報告した。その際，新しい教育学部の建設用地として，大学のキャンパスに隣接する３エーカーの土地をスキャモン夫人（Mrs. John Young Scammon）から贈与されたことも合わせて報告した[30]。

３月５日，ハーパー学長はシカゴ大学理事会に，以下のようなシカゴ学院理事会からの申し入れ書を提出した。

> 1901年２月５日付のわれわれの申し入れで提案したパーカー大佐の事業をシカゴ大学に併合する件の詳細に関する交渉を終了するにあたって，われわれは，パーカー大佐および彼の教師団との話し合いに基づき，また彼が事業の移管について満足のいく条件が確保されることを条件に同意したことに基づい

---

[28] Woody Thomas White, "The Study of Education at the University of Chicago, 1892-1958," unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1977, p. 59. パーカー自身のシカゴ学院での年俸は8,000ドルであった。これは，教育関係者の年俸としては全米で最高額であった。ちなみに，デューイのシカゴ大学での年俸は5,000ドルであった。

[29] Katharine M. Stilwell, personal interview, January 9, 1927, cited from Griffiths, op. cit., p. 105.

[30] Griffiths, op. cit., p.107; White, op. cit., p. 81. スキャモン夫人から贈与された土地については，次も参照．Ida B. DePencier, *The History of Laboratory Schools, the University of Chicago,* 1896-1965 (Chicago: Quadrangle Books, 1967), p. 44.

て，合併に関する以下の項目に満足を表明するものである。

第一：パーカー大佐はシカゴ学院（これは教員養成学部として設立される）の長（head）となり，この地位は彼が職務を果たすことができるかぎり続く。後任は（もし1907年7月より前に空席が生じたならば）われわれの指名に基づき，大学理事会が任命する。シカゴ学院は，教員養成部（Pedagigic School）と小学校および幼稚園とから構成される。中等学校はシカゴ学院と関係をもちながらも，（当面は）別個に設立され，運営される。デューイ博士を中等学校の長とし，彼がそこの長である間は，中等学校は大学の教育学科（Department of Pedagogy）の一部分と見なされる。しかし，デューイ博士が中等学校の長を辞めた後には，シカゴ学院に編入し，その後は一人の長のもとに一つの学校となる。

第二：（2月5日付の申し入れにあるような財政処置について扱っている）

第三：（大学は，半径1.5マイル以内に土地を購入することが述べられている）

第四：（教育学部生が追加の授業料なしに大学の授業を受けられる規定）

第五：（シカゴ学院が提供する資金の使途についての取り決め）

第六：（サマースクールについての規定）

結語　われわれの交渉において，われわれは貴大学の教授たちが手紙で表明した心からの歓迎の約束に感謝するとともに，シカゴ学院が大学に移管されたあかつきには，大学が有する諸資源および諸義務にしたがって，あらゆる有益な機会をパーカー大佐と彼の教員団に付与し，彼らが最も効果的に事業を遂行できるように計らうものと確信する[31]。

シカゴ大学理事会はこの申し入れを受け入れ，パーカーを終身の教育学部長とすることと，シカゴ学院理事会を新たに教育学部の諮問委員会として任命することを約束した[32]。そして1907年6月30日まではシカゴ学院理事会が事実上教育学部の運営に全責任をもつことが認められ，パーカーと彼の教師団の最大の不安であった自律性の確保はこれで当分の間は保障されることになった。

4月16日，シカゴ大学とシカゴ学院の両理事会は，合併について以下のような正式契約に署名した。

第一：大学は，1901年7月1日またはそれ以前に，大学の一部分として専門学部（a professional school）を設立し，大学と理事会が他の名称に同意しないかぎり名称を「シカゴ大学教育学部」（The University of Chicago School of Education）とし，これには教員養成部（Pedagogic School）と初等学校・幼稚園（an Elementary School with a Kindergarten）が含まれる。フランシスW.パー

---

[31] University of Chicago Board of Trustees to To Whom it may concerne, March 5, 1901; Griffiths, op. cit., pp. 108-109.

[32] Griffiths, op. cit., p. 109.

カーは教育学部の長（head）となり，彼がその職責を果たせなくなるまでその地位を保持する。もし1907年7月1日よりも前に教育学部長職に空席が生じた場合には，後任は理事会の指名に基づいて，大学が任命する。ただし，理事会の指名権は1907年6月30日に終了する。

第二：教育学部の設立と同時に，大学は中等学校を設立する。中等学校は，教育学部と関係をもちながらも，当面は教育学部とは別個に運営される。最初の長にはシカゴ大学教育学科の現在の長［デューイ］がなり，彼が長である間は，中等学校は教育学科の一部分と見なされる。しかし，彼が中等学校長を辞めたときには，教育学部の一部分となり，それに編入され，その後は一人の長のもとに一つの学校となる。

……（以下省略）……[33]

## デューイ実験学校の存続問題

シカゴ学院の併合により，シカゴ大学の新しい体制では，パーカーの教育学部が初等教員養成と附属小学校を担い，デューイの教育学科はシカゴ手工学校とサウス・サイド・アカデミーを母体に新たに設立される中等学校を担うことになった。その際，デューイ自身を含めて関係者の間では，デューイの実験学校は当面はパーカーの附属小学校と同じ建物に入って継続するが，2年後をめどにパーカーの附属小学校に統合されることが合意されていた。この点は，前出の1901年1月31日付ハーパー学長宛てのデューイの提案書で明らかである。

シカゴ学院の教員であったキャサリン・スティルウェルは，この時のいきさつを後年，次のように回想している。

> 計画では，最終的にデューイ博士は彼の小さな学校を放棄し，……パーカー大佐のもとに編入することになっていました。パーカー大佐は，デューイ博士がハイスクール部門を発展させ，自分は初等部門を発展させることを計画していました。これら以外に，私立のサウス・サイド・アカデミーとシカゴ手工学校も加えられることになっていました[34]。

しかしながら，ハーパー学長は，シカゴ学院の編入によってただちにデューイの実験学校は閉鎖され，シカゴ学院の小学校と一緒になって教育学部の附属小学校になると考えていた。そのため，実験学校の父母たちからは実験学校廃止に反対する声が猛然と沸き起こった。1901年3月19日に開催されたシカゴ大学の春期大学会議（convocation）で，シカゴ学院が大学に併合されることが報告され，パーカーが教育学部の附属小学校を指揮すると報告されると，実験学校の父母たちは実験学校の存続運動に立ち上がった。彼らは，もし実験学校がシカゴ学院の小学校と一緒になることに

---

[33] Chicago Institute & University of Chicago to To Whom it may concerne, April 16, 1901.

[34] Katharine M. Stilwell, personal interview, January 9, 1927, cited from Griffiths, op. cit., p. 98.

なれば，常に資金不足の状態にある実験学校は，資金的に豊かなシカゴ学院の小学校に飲み込まれてしまい，実験学校の独自性やこれまでの成果が無に帰してしまうのではないかと危惧した。また，彼らは，シカゴ学院の小学校のような教員養成を目的とする実習学校（practice school）そのものを嫌っていた。彼らは，自分たちの子どもが実習に供されることに反対であった。さらに，彼らは，デューイ自身が実験学校の指導から手を引き，中等学校の責任者になることにも反対であった[35]。

当時実験学校で教師をしていたローラ・ラニオン（Laura E. Runyon）は，父母たちの反対運動がどれほど白熱したものであったかを次のように回想している。

> パーカー大佐の学校がサウス・サイド［大学の所在地］に移転してくることになったとき，大学附属の小学校は一校にすることが提案されました。ハーパー学長は，デューイ・スクールの父母たちの不満を解消するために，ある晩，ミーティングを開きましたが，これには父親たちも出席しました。まったく息詰まるような雰囲気でした。教室はぎゅう詰めで，報告者たちが中に入れないほどでした。デューイ博士は，家族の病気のために来られませんでした。ハーパー学長がお話しをした後，エラ・フラッグ・ヤング夫人が父母を代弁して学長に学校の存続を訴えました。私は，彼女の話しを速記で書き取り，後でそれに手を入れてデューイ博士に渡しました。彼が今でもそれをもっているかどうかはわかりませんが，それは彼の学校とパーカー大佐の学校との違いを説明したもので，学校の存続に大いに役だったのでした[36]。

ラニオンが回想の中で言っているミーティングは，ロバート・マッコールによれば，1901年4月18日に開かれた。この席で，ハーパー学長はデューイの実験学校を閉鎖する理由を4つあげた。①デューイに実験学校と中等学校の二つの学校を監督させるのは彼の過重な負担となる。②大学周辺の人口は2つの小学校を設けるほど大きくない。③デューイ実験学校の存続はシカゴ学院に対する背信行為となる。④デューイの実験学校は赤字を出している。

これに対して，父母会側は4月23日付で反論の手紙をハーパー学長に送った。①デューイは二つの学校を「容易に」監督できると言明した。②大学周辺の人口は2つの小学校を設けても充分なほどである。③シカゴ学院に対して背信行為になると言うが，それはハーパー学長自身が責任を負うべき問題であって，それを理由に実験学校を廃止するのはおかしい。④赤字については，実験学校の父母会が毎年2,500ドルないし5,000ドルを大学に保障する[37]。

これより先の4月13日付で，デューイはハーパー学長に宛てて手紙を書き，実験学校の存続を訴

---

[35] DePencier, op. cit., p. 42.
[36] Laura E. Runyon, personal letter, January 31, 1927, cited from Griffiths, op. cit., p. 99.
[37] Robert L. McCaul, "Dewey and The University of Chicago, Part I," p. 156.

えた。

私は，教育学科の実験学校を父母たちの財政支援のもとで継続することに関して，貴兄が御指摘なさった点をあれこれ考えてきました。私は，この問題に関する私自身の態度を気にかけていました。しかし，いまや私は，存続の機会を活用することが学校にとっても，また父母，教師，そして私自身にとっても，正しい選択だと考えるに至ったことを表明します。これまでの交渉で常に取り上げられてきた問題，つまり実験学校を続けるだけの財政基盤がないという主張は，もはや通用しなくなりました。

私が当初から申し上げてきましたように，パーカー大佐が実験学校の教育事業を遂行することは絶対に不可能です。これは，2つの小学校のうちどちらが優れているかというような問題ではありません。大学の教育学科の実験室［実験学校］は，科学的方法で発見をおこなうことが主目的であり，教員養成の専門学校が運営する実習校とは全面的に異なっているのです。大学に教員養成学部が付設されたから教育学科の実験室はいらないという提案は，工学部ができたから物理学科の実験室はいらないと主張するようなものです。

もし大学の当局者たちが今回の提案［父母たちの財政支援のもとで実験学校を継続するという提案］を拒否するならば，（私自身をはじめ，実験学校の協力者，父母，および当校のこれまでの成果に関心と理解をよせる全国の教育関係者たちから）シカゴ大学は財政運営の都合のために科学研究を犠牲にしたと思われても仕方ないでしょう[38]。

デューイのこの手紙から明らかなように，実験学校の父母会は，実験学校の赤字を自分たちで補填してでも実験学校の存続を図りたいという提案を，既に4月18日のハーパー学長とのミーティングに先だっておこなっていた。デューイは，実験学校の存続に向けた父母会側のこうした熱意におそらくは動かされたのであろう。手紙の中で，彼は「この問題に関する私自身の態度」を検討した結果，父母会の提案を受け入れて実験学校を存続させることが「正しい選択」だと判断したことをハーパー学長に伝えている。そして，理事会がこの提案を受け入れて実験学校の存続を認めるよう学長から理事会に働きかけて欲しいと訴えている。おそらく，デューイはこの手紙とあい前後して，父母会に対して，自分が実験学校と中等学校の2つの学校の監督を引き受けることになっても「過重な負担」にはならないと言明したのであろう。手紙の中でデューイは教育学科の実験学校と教員養成学部の実習校との違いを明解に論じているが，これは4月18日のミーティングでヤング夫人が実験学校の父母会を代弁して論じた主張に重なるものであったろう。

その後，全米各地の教育関係者からデューイの実験学校の存続を望む手紙がハーパー学長とデューイのもとに多数寄せられた。ニューヨーク州立師範学校ニューパルツ校校長のマイロン・スカッダー（Myron Tracy Scudder）からは，4月19日付でハーパー学長宛てに次のような手紙が送られてきた。

---

[38] John Dewey to William Rainey Harper, April 1901.

全国の教育関係者は，デューイ博士の実験学校の停止を遺憾に思っております。過去2年間にこの学校がもたらしたインスピレーションと刺激は，この学校に直接関わっている人たちが理解している以上に，初等教育に多大の貢献をしています。もしこの学校を存続させる可能性が少しでもあるならば，シカゴ大学がその道を見い出されんことを切に希望いたします[39]。

スカッダーは，同日付でデューイにも手紙を書き，ハーパー学長宛ての手紙のコピーも同封した。

シカゴのことに口をだすのは差し出がましいかぎりですが，わが校［ニューヨーク州立師範学校ニューパルツ校］は貴兄の研究と実験学校に大いに関心をもっていますので，あえてハーパー学長に手紙を書いた次第です。ここにそのコピーを送ります[40]。

ペンシルベニア州立師範学校カリフォルニア校の教育実習主任ハーマン・ルーケンス（Herman Tyson Lukens）からは，4月20日付でデューイ宛てに次のような手紙が来た。

私は，ある友人から，ブレイン学校［シカゴ学院］のシカゴ大学への編入にともなって，貴兄の実験学校が存続を脅かされているという話しを聞きました。私は，貴兄が貴兄の学校でおこなってきた教育の事業を，パーカー大佐が彼のシカゴ学院でおこなえるとはとても思えません。ここ幾年もの間，私はつねづね，貴兄の学校と『シカゴ大学広報』（*University Record*）に掲載された実践報告を，教育事業における最も新鮮で最も刺激のある最良のパイオニアと見なしてきました。私は，貴兄の学校がその理念を取り上げられ失ってしまうことは，アメリカ全土の教師たちにとって損失になるだろうと思います。貴兄の学校がまさに実験学校として存続できる道は，必ずや見い出されるものと信じます[41]。

ネブラスカ大学教育学科のジョージ・ワシントン・アンドリュー・ラッキー（George Washington Andrew Luckey）からは，4月22日付でデューイ宛てに次のような手紙が来た。

パーカー大佐を長とするブレイン教員養成学校をシカゴ大学に編入する措置は，既に完了しているものと思います。これは，シカゴ大学にとって，また全国の教育関係者にとって，祝福すべき価値ある前進だと感じています。しかしながら，私が心配に思う点が一つあります。新しい教育学部は当然のことながら，規模の大きな実習校を付設することになりますが，それによって貴兄の実験学校が不必要とされてしまうのは困ります。あの実習校は確かに素晴らしいものであり，いま考えられているような計画

---

[39] Myron T. Scudder to William Rainey Harper, April 19, 1901.
[40] Myron T. Scudder to John Dewey, April 19, 1901.

に沿って組織されるべきですが，貴兄が指導してこられた実験学校は教育のオリジナルな研究にとって必要不可欠なものであり，それゆえ存続させるべきです。私のところにいる大学院の学生の何人かは，夏期にシカゴ大学に行って，貴兄の実験学校でお世話になり，深く印象づけられて帰ってきました。

コロンビア大学では，大きな実習校のほかに，興味深い実験学校ももっていますが，シカゴ大学もそうするならば，上級の教員養成にとってコロンビア以上とはいかなくても，少なくとも同じくらい有益な地位は占めるものと私は信じています[42]。

このほか，チャールズ・ドゥガーモ（Charles DeGarmo），フランク・マクマリー（Frank McMurry），アーネスト・ムーア（Earnest C. Moore），チャールズ・バンリュー（Charles Van Liew）といった著名な教育学者たちから，デューイの実験学校の存続を訴える手紙がハーパー学長宛てに続々と寄せられた[43]。

こうした状況の中で，結局ハーパー学長は，デューイの実験学校を存続させる方向で事態の収集を図ることになった。彼は，デューイの実験学校の存続について，シカゴ学院の理事会の態度を打診した。これに対して，4月29日付でブレイン夫人から次のような回答の手紙が送られてきた。

親愛なるハーパー博士

今日の午後，貴殿と話し合った後，私は電話で連絡が取れるかぎりで，諮問委員会［シカゴ学院理事会］の大多数のメンバーと話しをしました。その結果，デューイ博士の小学校でおこなわれている教育事業を妨害するようなことはなに一つするつもりはないという点で，私たちの意見は一致しているとお伝えしたいと思います。とりわけ，貴殿から送っていただいた父母たちの手紙を考慮すれば，大学と教育学部との関係の中には，大学がデューイ博士の学校を維持することを妨げるものはなに一つないというのが，私たちの考えです。私たちは，パーカー大佐も私たちの考えに完全に同意するものと理解しています[44]。

シカゴ学院の教員であったキャサリン・スティルウェルは，この件でパーカーのところに電話による働きかけがあったことを次のように回想している。

---

41) Herman T. Lukens to John Dewey, April 20, 1901. ちなみに，ルーケンスは後に，フランシス・ウェイランド・パーカー・スクールに勤めることになる。

42) G. W. A. Luckey to John Dewey, April 1901.

43) McCaul, op. cit., pp. 155-156. チャールズ・ドゥガーモはハーパー学長宛の手紙で「デューイこそは教育実験を遂行できるアメリカでただ一人の人物であり，彼の実験は教育の将来の進歩にとってはかり知れないほどに重要だ」と書いている。Charles DeGarmo to William Rainey Harper, April 22, 1901, cited from McCaul, op. cit., p. 54.

44) Anita McCormick Blaine to William Rainey Harper, April 29, 1901, cited from Griffiths, op. cit., pp. 100-101.

その日，私はパーカー大佐のオフィスにいましたが，彼はこの件に関して電話で話しをしていました。相手は――たぶん，ハーパー学長かブレイン夫人だったと思いますが――実験学校の父母と教師たちの異論を彼に伝え，それに対して彼がこう言ったのを聞きました。「彼には彼の小さな学校を続けてもらおう。われわれはこの種の学校をいくつもやることはできない。」[45]

このようにシカゴ学院側の了解が得られたうえで，4月30日，シカゴ大学理事会はデューイの実験学校の存続について，次のような決定をおこなった。

委員会は，大学小学校［デューイの実験学校］の父母会を代表するケント他からの以下の質問を含む手紙を報告した。

1．もしわれわれが大学に毎年2,500ドルを，向こう5年間にわたって保障するならば，学校は存続できるだろうか。

2．もしわれわれが大学に毎年5,000ドルを，向こう5年間にわたって保障するならば，学校は存続できるだろうか。

第1の質問については否定の回答を，第2の質問については次のように回答することを票決した。すなわち，大学は，関係する父母を含むこの事業の支援者たちが，授業料収入を超える赤字分に相当すると大学が認める金額を毎年前もって寄付することを条件に，ジョン・デューイ教授の全般的監督のもとにこの事業を継続することを認める[46]。

この決定は，実験学校の父母会に通知され，彼らはただちにこの決定を受け入れた[47]。こうして，デューイの実験学校は，1901－1902年度以降，少なくとも5年間は従来どおりデューイの指導のもとで存続することが認められた。しかし，そのために実験学校の父母会は，授業料収入を超える赤字分として毎年5,000ドルを大学に寄付するという金銭的な負担を負うことになった。

## 2．シカゴ学院併合後の諸問題

### ブレイン・ホールの設計計画をめぐるデューイとジャックマンの対立

教育学部の新しい建物は，合併条件にしたがって，大学のキャンパスに隣接するスキャモン・

---

[45] Katharine M. Stilwell, personal interview, January 9, 1927, cited from Griffiths, op. cit., p. 100.
[46] University of Chicago Board of Trustees to To Whom it may concerne, April 30, 1901.
[47] William Rainey Harper to William Kent, Charles F. Harding, E. E. Chandler, and John F. Holland, May 1, 1901; William Kent to William Rainay Harper, May 8, 1901.

コート（Scammon Court）に建てられることになった。この土地は，シカゴ大学の初代理事の一人であったジョン・ヤング・スキャモン（John Young Scammon）氏の未亡人が，敷地を亡夫の名を記念してスキャモン・コートという名前で呼ぶことを条件に，大学に寄贈した土地であった。そして，建物はブレイン夫人の亡夫の名を記念して，エモンズ・ブレイン・ホール（Emmons Blaine hall）と名付けられることになった[48]。

ところが，このブレイン・ホールの建設計画をめぐって，シカゴ学院のウィルバー・ジャックマン（Wilbur Samuel Jackman）とデューイとの間に対立が生じた。ジャックマンは，クック郡師範学校以来パーカーの右腕となってきた人物で，シカゴ学院では主監（Dean）を勤めていた。デューイは，5月30日付のハーパー学長宛の手紙で，ジャッマンが建築家のロジャーズ氏（Mr. Rogers）の設計に難色を示し，彼らが入ることになっている教員養成部（pedagogic school）と附属小学校（elementary school）に過大なスペースと建築資金を割り当てようとしていると訴えた。そして，そのためにジャックマンは，不当にもデューイが監督することになっている中等学校の普通科（academic school）と手工科（manual training school）の建物の建設を後回しにするよう要求しているとジャックマンを非難した。

ジャックマンにしてみれば，もともとブレイン・ホールはパーカーの教育学部のための建物であって，中等学校は将来的には教育学部の附属小学校と一つになって初等・中等一貫校になることになっているとはいえ，当分の間はデューイの教育学科に所属し，教育学部とは別個に運営されるのだから，中等学校の建物を後回しにして，教員養成部と附属小学校の建設を優先するのは当然のことだという考えがあったのであろう。これに対してデューイは，将来の計画を見据えて建物を順々に建てていかなければならないことは当然だとしながらも，だからといって中等学校の建物は後回しでよいということにはならないだろうと主張した。そして，ジャックマンの態度は，状況を適切に判断する能力の欠如か，さもなければ了見の狭さを示しており，「ジャックマン氏に自己抑制が働けば，少なくともパーカー大佐とは合意できるでしょう。教育学科が中等教育部門を引き受けることに彼らは同意したのですから，建物計画の中に中等学校をはっきりと位置づけるように私が主張するのは当然のことでしょう」と論じている[49]。

さらにデューイは，6月12日付のハーパー学長宛の手紙で，いずれにせよ教員養成部と附属小学校の建設はおこなわれることになるだろうが，集会室と体操場を造ることをやめれば，中等学校の普通科か手工科の少なくとも一方を建設する資金は捻出でき，工作室と実験室さえ整っていれば，もう一方の科は教員養成部の空き教室で間に合わせることができるので，ぜひ集会室と体操場の建設はやめて，この妥協案を認めて欲しいと訴えている[50]。

---

[48] DePencier, op. cit., pp. 44-45. ただし，ディペンシアによれば，その後この土地はブレイン・コートと呼ばれるようになり，スキャモン氏の名はその一画にあるスキャモン・ガーデンに残されているという。

[49] John Dewey to William Rainey Harper, May 30, 1901.

[50] John Dewey to William Rainey Harper, June 12, 1901.

ブレイン・ホールの建設計画をめぐるこうした対立がどういう形で決着したのか，詳細はわからない。

1901年6月28日，大学創立10周年記念式典に合わせて，ブレイン・ホールの起工式がおこなわれた。記念式典には，創立者のジョン・ロックフェラー夫妻も出席した。ハーパー学長は，この日ブレイン夫人を学長宅に招き，それから彼女をロックフェラー夫妻およびサリスバリー教授とともに馬車に乗せて，式典会場のケント・シアターに向かってきっかり12時12分前に出発した。そして，12時ちょうどに到着して，バトラー教授（Nathaniel Butler）がスピーチをおこなった。セレモニーが終了した後，一行はスキャモン・コートまで行進し，ハーパー学長の短い挨拶に続いて，フランシス・パーカーがテープカットとクワ入れをおこない，それからスピーチをおこなった。彼は「来れ，子どもたちとともに生きよう」というフレーベルの言葉でスピーチを締めくくった[51]。

1901年7月1日，パーカーと彼の教員スタッフは，大学のキャンパスにほど近いコズミンスキー・パブリック・スクール（Kozminski Public School）を借りて夏学期の授業を開始した[52]。そして，教育学部の仮校舎として，ブレイン・ホールとは別に，エリス街と57番通りの角（Ellis Avenue & 57th Street）に新たに建物が建てられ，10月1日に正式に教育学部が開校した。この建物は，現在は大学の購買と書店になっている。

### デューイ夫人の校長職任命問題

デューイは，カリフォルニア大学バークレー校で夏期講義をおこなうため，6月中旬に家族を連れてシカゴをたち，西部に向かった。途中のユタ州プロボ・シティにあるブライアム・ヤング・アカデミー（Brigham Young Academy）で，1週間，教育心理学の集中講義をおこない，6月26日にカリフォルニア州立師範学校サンノゼ校の卒業式で記念講演をおこなった後，6月27日から8月7日まで，カリフォルニア大学バークレー校で夏期講義をおこなった[53]。

カリフォルニア滞在中の7月，デューイは，ヤング夫人から，ハーパー学長が実験学校の次年度（1901－02年度）の計画，とりわけデューイの妻アリスを実験学校の校長にすることについて，事前にデューイから何の相談も受けていないと異議を唱えていることを知らされた。デューイは，7

---

[51] DePencier, op. cit., p. 45; White, op. cit., p. 83.

[52] DePencier, op. cit., p. 43; Griffiths, op. cit., p. 112.

[53] John Dewey to Benjamin Ide Wheeler, March 21, 1901; George H. Brimhall to John Dewey, March 25, 1901; Bemjamin Ide Wheeler to John Dewey, March 27, 1901; John Dewey to George H. Brimhall, April 1, 1901; John Dewey to Geoge H. Brimhall, April 3, 1901; Benjamin Ide Wheeler to John Dewey, April 6, 1901. デューイが，カリフォルニア州立師範学校サンノゼ校でおこなった卒業式記念講演は，*Later Works of John Dewey*, vol. 17, pp. 63-66，に掲載されている．デューイがカリフォルニア大学バークレー校でおこなった夏期講義の題目は、「教育心理学」「Educational Psychology）と「19世紀の倫理思想」(Ethical Thought of Nineteenth Century）であった。John Dewey to Elmer Ellsworth Brown, January 25, 1901; Benjamin Ide Wheeler to Elmer Ellsworth Brown, February 1, 1901.

月22日付でハーパー学長に手紙を書き，この件で次のように謝罪した。

ヤング夫人からの知らせで，実験学校の次年度の予算に関わる職員名簿を貴兄に送付するに先立って，とりわけ校長職に妻の名があることに関して，事前にお会いしてお話しをしておかなかったことを，いまさらながら後悔しております。私は，カリフォルニアに出発する前に，できるかぎり仕事を片付けておきたいと焦ったのだと思います。校長がなかなか見つからなったのです。妻の名はぎりぎりになって私が提案したのです。ヤング夫人ではありません。妻は文字どおり土壇場で同意したのです。これは予算書を送付するほんの23時間前だったと記憶していますが，やはり私は貴兄に御相談申し上げる時間を見つけるべきでした。私が意図的に無礼を働いたのではないことはおわかりいただけると思います。送付したのが妻の名前であったればこそ，通常以上に私はすべてを率直にお話しするよう努力すべきでした。しかし，私は自分の時間に追われてしまったのです。……

貴兄に相談しなかったことを妻は知りませんでした。そして，当然のことながら，彼女もそのことを不快に感じています。彼女は拒絶と躊躇の末にやっと校長を引き受けました。もし貴兄がこの問題で何か異議を申し出るようなことがあれば，彼女はやり直しを求めていることをはっきり伝えて欲しいと私に言っています[54]。

デューイは全面的に自分の非を認め，場合によっては妻アリスを校長にしたことを撤回してもよいとまで譲歩している。これに対して，ハーパー学長は8月2日付でデューイに返事の手紙を書き，デューイの謝罪を受け入れて，問題を穏便に収めたことを伝えた。

ヤング夫人は私の言葉を大げさに受け取ったのだと思います。もちろん，とても重大なことが相談なしに決められたことに驚いたと申しあげたことは，彼女の言うとおり本当です。しかしながら，［次年度の実験学校の］予算は通過し，任命も貴兄の提案どおりなされましたので，御安心ください。私はやり直しなど求めるつもりはないとデューイ夫人にもお伝えください[55]。

ついでに，ハーパー学長はこの手紙で，教育学部が今年度（1901－02年度）に入る建物として2,300ないし2,400ドルで緊急に建物を建てることになったと知らせている。たぶん，エリス街と57番通りの角に建てる仮校舎のことであろう。そして，この建物はゆくゆくは，臨時の女子体操場およびクラブハウスとして使用することになると知らせている。

### 附属小学校の名称問題

シカゴ学院の併合によって，シカゴ大学では1901年10月から，デューイが監督する教育学科の小

---

54) John Dewey to William Rainey Harper, July 22, 1901.
55) William Rainey Harper to John Dewey, August 2, 1901.

学校と，パーカーが監督する教育学部の小学校の2つの小学校が併存することになった。ところが，後者が生徒募集の案内状に「大学小学校」(The University Elementary School) という名称を用いたため，従来からこの名称を用いてきたデューイの実験学校との間で，生徒の募集をめぐって混乱と対立が生じた。具体的には，デューイの実験学校に入学案内を請求するつもりで，教育学部の「大学小学校」の方に入学案内を請求してしまう人たちが続出したのである。しかも，はっきりとデューイの実験学校の入学案内を求めて問い合わせてきた人に対しても，教育学部の主監であるジャックマンと秘書のスティルウェルは，どちらも「同じ学校です」という誤った説明をして，自分たちの小学校の案内状を送るという事件まで起きた。

デューイは，1901年9月16日付で，ハーパー学長に小学校の名称問題で申し入れをおこない，教育学部の小学校が「大学小学校」の名称を用いるのは不当であり，ただちに訂正されるべきだと訴えた。そして，大学に2つの小学校が存在することから生じるやむをえない混乱は認めるにしても，ジャックマンとスティルウェルのしたことは，許しがたい背信行為だと激しく非難した[56]。

この訴えにもかかわらず，結局，デューイの実験学校は「大学小学校」という公式名称を放棄して，代わりに「大学実験学校」(The University Laboratory School) という名称を用いることにした。そして，パーカーの教育学部の小学校は「大学小学校」という名称の頭に「パーカー大佐が指導する」(Colonel Parker as Director) という言葉を載せ，後ろに「ブレイン財団設立」(on the Blaine Fundation) という言葉を付記して用いることにした。これは，ハーパー学長による苦肉の妥協策だった。

デューイは，1901年9月26日付でジャックマンに直接手紙を書き，小学校の名称問題でジャックマンのとった態度は「ビジネス上フェアではないし，礼儀を欠くものだ」と抗議した。デューイは，この手紙で，小学校の名称問題以外にも，教育学科のスタッフのうち教育学部の授業担当者として正式に任命を受けた者の名前が教育学部の案内状に記載されていなかったことや，教育学科の監督下にある附属中等学校が教育学部の案内状の中で教育学部の一部であるかのように記述されていたことなど，この間，ジャックマンによってなかば意図的になされたと思われる不手際について，毅然と抗議している。

## 3．附属中等学校長としてのデューイの取り組み

### 校舎建設計画をめぐって

既に見たように，シカゴ学院の編入にともなって，パーカーとデューイの間では，前者が初等教育を，後者が中等教育を指導するという明確な住み分けが図られた。ただし，デューイの実験学校

---

[56] John Dewey to William Rainey Harper, September 16, 1901.

に関しては，父母会が経費の赤字を賄うという条件で，そのままデューイの指導のもとに存続することになった。しかし，これはあくまでも特例の措置であって，シカゴ学院の編入に関する交渉過程で，デューイ，パーカー，ハーパーの三者の間では，パーカーの教育学部は初等教員養成を，デューイの教育学科は中等教員養成を担うことが合意されていた。そして，将来的には2つの小学校と既に大学に編入されていたサウス・サイド・アカデミーおよびシカゴ手工学校とを，大学のキャンパスに隣接する建物にすべて統合し，初等・中等一貫の附属学校とすることが構想されていた。しかし，当面の間は，教育学部の小学校を附属一貫校の初等部としてパーカーが監督し，中等部はサウス・サイド・アカデミーを普通科に，シカゴ手工学校を手工科（職業科）として，デューイが監督することになっていたのである。

1901年7月，1901－02年度の開始とともに，デューイは正式に大学附属中等学校長（Director of the University Secondary School）の仕事を開始した[57]。

既にデューイは，それ以前の5月末の段階で，ブレイン・ホールの建設計画に関連して，シカゴ学院のジャックマンが彼らの教員養成部（College of Education）と附属小学校の建設を優先するために中等学校の建設を後回しにしようとしていると抗議していた[58]。この問題はその後もかなり尾を引いたと見える。デューイは，年明けの1902年1月10日付でハーパー学長に手紙を書き，中等学校の建物の計画やスペースの割り当てが自分の知らないところで勝手に進められていることに異議を申し立てている。デューイは，中等学校の建設計画については自分にも発言権があるはずだから，事情をきちんと説明して欲しいとハーパー学長に申し入れている。[59] これに対して，ハーパー学長は，この問題で早急にデューイと話し合う用意があるとしながらも，シカゴ学院との契約で，もともとブレイン・ホールはシカゴ学院が計画を立てることになっていて，その計画の中に中等学校のスペースも含まれているのだから，中等学校は建物に関して教育学部の管轄下に置かれるのは当然のことだとデューイを説得している[60]。

### 中等教員養成への取り組み

中等教員養成についても，デューイは積極的に体制の整備に着手している。1901年10月17日付で，デューイは動物学科のダベンポート教授（Charles B. Davenport）に手紙を書き，シニア・カレッジ（学部の3，4年生課程）でのハイスクール教員免許取得コースの開設について，関係者による会議の開催を呼びかけている[61]。デューイは，数年前から中等教員養成の体制整備について

---

[57] DePencier, op. cit., p. 51; Gustafson, p. 86.

[58] John Dewey to WilliamRainey Harper, May 30, 1901; John Dewey to William Rainey Harper, June 12, 1901.

[59] John Dewey to WilliamRainey Harper, January 30, 1902.

[60] William Rainey Harper to John Dewey, January 13, 1902.

[61] John Dewey to Charles B. Davenport, October 17, 1901.

ハーパー学長に提案をおこなっていた。それは，大学の各学科でそれぞれの専門教科に関する教職向けの科目を開設し，教育学科で教育学と教授法および教育実習を担当するというものであった[62]。今回のダベンポート教授への手紙でデューイは，①中等教員養成に取り組むための大学全体としての体制のあり方，②各学科が教職向けに開設する専門教科に関する科目の内容と科目数，③各学科による科目の関連づけと学生の自由選択の余地について，とりあえずは関心のある人たちだけで集まって話し合うことにしたいので，ダベンポート教授が教職向けにふさわしいと考える動物学科の科目について教示して欲しいと書いている。

しかし，ダベンポート教授からは返答がなく，デューイは11月15日付で再びダベンポート教授に手紙を書き，中等教員養成向けの科目のグルーピング化について早急に会議をもつべきだと記している[63]。

### 『スクール・レビュー』誌の編集

『スクール・レビュー』は，1893年以来シカゴ大学が発行している中等教育の専門雑誌である。長年この雑誌の編集にはチャールズ・サーバー（Chaarles H. Thurber）が携わってきた。彼は，シカゴ大学の予備門であるモーガン・パーク・アカデミーの教頭（Dean）で，教育学准教授として非常勤で教育学科の中等教育に関する科目を担当していた。ところが，1900年6月をもって彼はモーガン・パーク・アカデミーおよびシカゴ大学を辞職することになり，『スクール・レビュー』の編集の責任はデューイの教育学科が引き受けることになった。さらに，シカゴ学院の編入にともなって，デューイは附属中等学校長に就任し，シカゴ大学の中等教員養成に直接責任を負う立場に立つことになった。

既にデューイは，1900年2月3日付のハーパー学長宛ての手紙で，サーバーの辞職が正式に決まれば『スクール・レビュー』は教育学科が発行する専門雑誌として位置づけたいと申し入れていた[64]。そして，実際の編集の実務は，教育学科のジョージ・ハーバード・ロックが担当した。

デューイは『スクール・レビュー』の編集に関して，しばしばフランク・マニーに相談している。もともとマニーはデューイが個人的に絶大な信頼を置くハイスクールの教師であり，1900年の秋からはニューヨークの名門私立中等学校であるエスィカル・カルチャー・スクールで監督（superintendent）をしていた。デューイは中等教育専門雑誌の編集にあたって，マニーのそうした経歴に基づく見識と人脈を大いにあてにしていたのであろう。1901年1月7日付のマニー宛ての手紙で，デューイは彼に『スクール・レビュー』への論文投稿を促すとともに，『スクール・レビュー』で私立中等学校について特集を組みたいので，どういったテーマの論文をどういう人に依

---

[62] John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.
[63] John Dewey to Charles B. Davenport, November 15, 1901.
[64] John Dewey toWilliam Rainey Harper, February 3, 1900.
[65] John Dewey to Frank A. Manny, January 7, 1901.

頼したらよいか教えて欲しいと依頼している[65]。

また，1901年11月1日付のマニー宛ての手紙で，デューイは次年度の『スクール・レビュー』誌上で「ハイスクール教育の社会的役割」をテーマにした特集論文の連載をするつもりであるので，マニーに「地域社会センターとしてのハイスクール」について1本論文を書いて欲しいと依頼している[66]。

この同じ手紙で，デューイは『スクール・レビュー』は今や教育学科に委ねられており，自分が編集責任を引き受けることになるだろうから，マニーに論文の投稿だけでなく，テーマの示唆や執筆者の推薦についてもぜひとも手伝って欲しいと依頼している[67]。しかし，『スクール・レビュー』の編集は，実質的には既に前年からデューイの手に委ねられていた。

このほか，デューイは『スクール・レビュー』に関して，1902年1月7日付で，ミシガン大学の動物学教授のヤコブ・レイアード（Jacob E. Reighard）宛てに手紙を書き，その中で，前年の11月号にハムリン・カレッジ（Hamline College）のオズボーン教授（Henry L. Osborn）にハイスクールとカレッジにおける動物学の扱いの違いについて論文を書いてもらったが，同じようにレイアード教授にもハイスクールにおける動物学の観点と方法について，大学の研究者の立場から論文を書いて欲しいと依頼している[68]。

**人事構想**

その後デューイは，2月5日付のマニー宛ての手紙で，近い将来，教育学科の管轄下に中等学校を組織することになるだろうと書き，そうなればエスィカル・カルチャー・スクールでマニーと同じく監督（superintendent）をしているジョン・フランクリン・レイガート（John Franklin Reigart）を中等教育担当の教授兼附属中等学校主事（supervisor）としてシカゴ大学に招聘し，彼に中等教員養成のまとめ役の仕事もしてもらおうと思うが，どうだろうかとマニーに相談している[69]。レイガートはこの時期，休暇を取ってニューヨークを離れていたようで，デューイは先に1902年1月29日付のマニー宛の手紙で，レイガートの現住所と今後の予定を尋ねており[70]，そして2月5日付のこの手紙で，マニーが送ってくれたレイガートに関する調書に謝意を表している。しかし，デューイのこの人事構想は実現しなかった。

---

66) John Dewey to Frank A. Manny, November 1, 1901.
67) Ibid.
68) John Dewey to Jacob E. Reighard, January 7, 1902.
69) John Dewey to Frank A. Manny, February 5, 1902.
70) John Dewey to Frank A. Manny, January 29, 1902.

## 4．教育学部長への就任

### パーカーの死去

1901年7月にシカゴ学院がシカゴ大学に編入されてからまだ8カ月ほどしかたっていない1902年3月2日，かねてから体調を崩して療養中だったフランシス・パーカーが死去した。そのため，編入の際の取り決めにしたがって，後任の教育学部長を，旧シカゴ学院の理事会（正式には教育学部の諮問委員会）が指名し，それに基づいて大学の理事会が最終的に任命することになった。

パーカーが死去した翌日の1902年3月3日付で，実験学校の父母の一人であるネリー・オコナー（Nellie J. O'Conner）がデューイに宛てて手紙を書き，父母会としてはこの機会に2つの附属小学校（すなわち，デューイの実験学校と教育学部の実習学校）をデューイの指導のもとに一つの学校に統合するよう運動する意向を伝えている。そして，父母代表数名とデューイおよびデューイ夫人とで早急にこの問題で話し合いをもちたいと申し入れている[71]。

実験学校の父母会は，ちょうど1年前の1901年3月に実験学校がパーカーの実習学校に統合されることが明らかになったときには，猛然と統合反対運動を展開し，実験学校の運営資金の赤字分を自分たちで調達することを条件に，何とか実験学校の存続を大学理事会に認めさせた経緯がある。その父母会の代表者の一人が，1年後にパーカーの死去の報を聞くやいなや，今度は自分たちの方から2つの附属小学校の統合を進めるよう働きかけたいと言い出したのである。1年前の統合反対運動の際に，実験学校の父母会が示した統合反対の理由は，研究大学の教育学科の実験室である実験学校と，もともと師範学校の実習学校であった教育学部の附属小学校とでは，学校の性格が根本的に異なるというものであった。だが，いまやこの反対理由は実質的にほとんど意味のないものだったことが証明されたわけである。実質的な反対理由は，要するに自分たちの学校がパーカーの学校に吸収されてしまうことへの不安にあったわけである。

オコナーの申し出に対して，デューイは3月7日付で返事の手紙を書き，パーカーが死去して間もない今の時点で両小学校の統合について話題にするのは時期尚早だろうと述べている。しかし，同時に，実験学校の父母たちの申し出には謝意を表し，状況がもう少しはっきりしてきたら，統合問題で父母の代表者たちと話し合いをもちたいと述べている[72]。

### デューイの教育学部長就任に至る経緯

パーカーの後任の教育学部長を選出するため，旧シカゴ学院の理事会では4月30日に会議を開き，デューイとウィルバー・ジャックマンの2人の名前を候補者としてあげた。そして，この2人のい

---

[71] Nellie J. O'Conner to John Dewey, March 3, 1902.
[72] John Dewey to Nellie J. O'Conner, March 7, 1902.

ずれを選ぶべきかについて，ブレイン夫人が教育学部の教員スタッフに直接会って，彼らの意向を打診することになった[73]。

候補の一方に名前のあがったジャックマンは，同じ4月30日の日付でハーパー学長に，教育学部の組織改革についての意見具申をおこなっている。これは，4月28日付の学長からの諮問に応えたものである。その中でジャックマンは，教育学部を大学の教育学科と合体させて大学本体に組み入れたいとするハーパー学長の構想に明確に反対の立場をとり，教育学部はこれまでどおり教育学科および大学本体とは別個の独立した組織として存続すべきだと主張した。そして，教育学部は一人の統括的な責任者のもとに，全教職員による意思決定という組織形態をとるべきで，これによって教育学部は人事，俸給，昇進などに関して，自らの特殊事情に応じた内部統治が可能となると論じている[74]。ここには，クック師範学校以来パーカーという一人のカリスマ的な指導者のもとに，全教職員が一致団結して内部統治をおこなってきた旧シカゴ学院のやり方をそのまま維持したいとするジャックマンの強い思いが映し出されていた。と同時に，教育学部がはっきりとシカゴ大学本体の中の一学部として位置づけられれば，もともと師範学校の教員スタッフであった教育学部の教員スタッフは，大学の組織の中で相対的に地位の低下を招くことは必定であった。その点からも，ジャックマンは教育学部を大学本体とは別個の独立の組織としておきたかったわけである。

実際のところ，教育学部は実態的には師範学校のままであった。シカゴ大学への編入にあたっても，パーカーは従来と同じ2年間の教員養成コースを置くのみで，大学卒業と同等の4年間の教員養成コースを設置しようとはしなかった。そのため，学生は卒業時点で学位（degree）ではなく教員資格（certificate）を授与されるのみであった。カリキュラムも，師範学校の伝統的なカリキュラムのままであり，各教科についての学習がほとんどを占めていた[75]。

さらに教育学部の管理運営についても，ブレイン夫人を中心とする旧シカゴ学院の理事会が，大学理事会の諮問委員会という形で，そのまま決定権を保持していた。パーカーをはじめとする教育学部の教員スタッフは，任命，俸給，昇進等に関して，すべてこの旧シカゴ学院理事会の監督下にあり，そのことによって彼らは内部統治の独立性を維持していたわけである。彼らは意識においても実際の職務においても，大学の組織には属さず，師範学校の教員のままであり続けていた[76]。

ハーパー学長は，パーカーの死去を契機に，教育学部のこうした在り方を改めて，名実ともに教育学部を大学の中の一学部として位置づけ，それによって，彼がかねてから構想していた「大学における教員養成」を本格的に実現したいと考えたのである。

従来の師範学校の教員養成は，ハイスクール卒業生にさらに2年間の教育をプラスし，それに授業技術の実習訓練を施して小学校の教員を養成するものであった。ハーパー学長は，このような小

---

[73] Chicago Institute to To whom it may concern, April 30, 1902. White, op. cit., p. 92, 参照.
[74] Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, April 30, 1902.
[75] White, op. cit., pp. 89-90.
[76] Ibid., pp. 83-84.

学校教員養成に特化した専門学部（professional school）としての教育学部に反対であった。彼は，大学の各分野においてそれぞれの専門教育を受けた者を，初等教育および中等教育の教員として養成することを考えており，そのための専門学部として教育学部を大学本体の中に位置づけたいと考えていたわけである。ハーパー学長の構想では，初等教育および中等教育の教員養成は大学全体でいわば開かれた形で取り組む大学教育の機能であり，その機能のコーディネーションを教育学部が担うという構図なのである。

ジャックマンの主張はこれに真っ向から対立し，教育学部を大学本体とは別個の教員養成専門の学部（スクール）として，いわば大学に付置された師範学校として維持しようとするものであった。彼は，教育学部をちょうどラッシュ・メディカル・カレッジ（Rush Medical College）すなわちシカゴ大学医学部と同じように，大学との関係で独立の専門学部と見なされるべきだと主張した。彼は，教員養成を医師の養成と同じ閉じた専門職養成と考えていたわけである。これに対して，ハーパー学長は，大学はそれ自体が初等・中等教育を含む公教育制度全体の頂点に位置しているのだから，初等および中等教育の教員養成は，まさに公教育の頂点に位置する大学が全体として担うべき機能であって，何か特別な場所で特別な訓練を必要とする閉じた専門職養成であってはならないと考えていたのである。

ジャックマンのこの学長宛ての意見書が書かれた翌日の1902年５月１日付のシカゴ大学理事会では，デューイがパーカーの後任の教育学部長に候補として名前があがっていることが報告され，もしもデューイがシカゴ学院理事会から正式に指名された場合には，次年度に向けて学長がしかるべき措置と通知をすることを承認た[77]。

一方，シカゴ学院の教員スタッフは，ブレイン夫人から後任の教育学部長にデューイとジャックマンのいずれがふさわしいかについて打診を受け，ブレイン夫人同席のもとでこれを協議した。その結果，教員スタッフの一人であったスティルウェルの回想によれば，「附属小学校の教員会議は投票で，新しい学部長にデューイ博士を任命するよう求めることに決定しました。[78]」

ブレイン夫人の依頼によりエミリー・ライス（Emily J. Rice）がこのときの教員会議の議事要旨を作成し，それを５月２日付でブレイン夫人に送っている。それを見ると，デューイを教育学部長（Director）に，ジャックマンを主幹（Dean）兼理科主任（Head of the Department of Science）にするとしている。そして，デューイを教育学部長にした場合，彼のもとで教育学部が大学の教育学科と一体化されて大学本体に吸収されてしまうようなことがないように，教育学部があくまでも独立の組織でいるための方策を検討している。すなわち，教育学部長はあくまでディレクターという立場にとどまり，教育学部の各科（departments）の人事権は，大学の各学科（departments）と同じように，各科の長（head）がもつことにし，附属小学校も教育学部内の

---

[77] University of Chicago Board of Trustes to To whom it maay concern, May 1, 1902.
[78] Katharine M. Stilwell, personal interview, p. 6, cited from Griffiths, op. cit., p. 113.

一つの科と見なして，校長（principal）が人事権をもつことにするとしている。そして，校長はシカゴ学院理事会によって選任されるとしている。また，学校年の期間の設定や，カリキュラムの変更，新しい科の設置とそれにともなう教員の任命，さらには財政上の措置など，学部運営上の重要事項についても，学部長と主幹の決裁に加えて，その他2名以上の管理職（officers）の承認を必要とすることにし，この管理職はシカゴ学院理事会が指名するとしている。そして，教育学部の最終的な決定権はシカゴ学院理事会に属するとしている[79]。

このようにして，教育学部の管理運営については，先にジャックマンがハーパー学長に意見具申した線に沿って，教育学部を大学本体とは別個の独立した組織として運営することを基本にすえ，一人の統括責任者のもとに全教員による意思決定を尊重するという組織形態がとられることになった。これによって，デューイは教育学部長に就任しても，それは大学本体の各学科の主任教授（head professor）のように自らの組織構想に基づいて管理運営に直接権限を振るう長（head）ではなく，人事にしても教学にしても，主幹や各科の長その他の管理職を通じて，教員スタッフの意向を受けながら，それに配慮する形で教育学部の管理運営に責任を負うディレクターにとどまることになったのである。

5月5日，ブレイン夫人はシカゴ学院理事会において，教育学部の教員スタッフとの協議結果を，上述のエミリー・ライスが作成した議事要旨に基づいて報告した。そして，教員スタッフの一致した意見として，「ジャックマン氏は教育学部のリーダーにはふさわしくないこと，デューイ博士をリーダーに迎えることが教育学部にとって非常に望ましいこと，当分の間はパーカー大佐が進めてきた線に沿って活動できる自由が確保できたことは教育学部にとってきわめて重要であること」を伝えた[80]。しかし，この日の理事会では後任の決定は保留された。

翌日の5月6日，理事会は後任決定の参考にするために直接デューイに面会することを決め，ブレイン夫人がこのことをハーパー学長に相談して，学長が賛成すればデューイを理事会に招くことにした[81]。

翌日の5月7日の理事会にはデューイも出席し，彼が教育学部長になった場合に，パーカーとシカゴ学院が進めてきた教員養成の仕事の独自性を彼がどの程度尊重し継続してくれるのかを，彼に直接問いただした。デューイは，発足したばかりの教育学部の運営について見直しを図りたいと述べたが，変更は状況を見ながら，教員スタッフの各責任者たちとも相談してゆっくり進めたいと述べた。続いて，シカゴ学院理事会の在り方についても協議され，デューイは理事会が教育学部の管理運営に諮問機関（committee）ないしは評議機関（senate）として一定の権限を保持することに反対はしないが，理事会の権限は結局のところ教育学部長に選任される人物のパーソナリティ次

---

79) Emily J. Rice to Anita McCormick Blaine, May 2, 1902.
80) Chicago Institute to To whom it may concerne, May 5, 1902.
81) Chicago Institute to To whom it may concerne, May 6, 1902.

第で決まると述べた。そして，ハーパー学長も理事会が諮問機関となることには消極的だろうと述ている。最後に，デューイが教育学部長に就任したならば，どれくらいの時間を教育学部の仕事に割くことができるのかが審議された。これについてデューイは，哲学科の仕事を放棄することはしないが，できるかぎり教育学部の仕事に時間をとり，単に名目上ではなく実質的に教育学部長としての責任を果たすつもりだと述べた。以上でこの日の理事会は終了し，審議は継続となった[82]。その後，シカゴ学院理事会はパーカーの後任の教育学部長にデューイを指名することを正式に決定した。

5月20日，シカゴ大学理事会はシカゴ学院理事会の指名に基づいてフランシス・パーカーの後任の教育学部長にデューイを正式に任命した[83]。翌日デューイは，シカゴ学院理事会が自分を教育学部長に指名してくれたことを感謝する手紙をブレイン夫人に書き送っている[84]。

### デューイが教育学部長に指名された理由

シカゴ学院の教員スタッフがパーカーの後任に，自分たちの同僚のジャックマンではなく，デューイを選んだのはなぜであろうか。これにはいくつかの理由が考えられる。第1に，デューイはシカゴのみならず全米の教育界において，パーカーに匹敵するほどの名声を得ていたことがあげられる。クック郡師範学校時代以来，パーカーのもとで常に全米の初等教育改革運動をリードし，多くの称賛を得てきたシカゴ学院の教員スタッフにしてみれば，パーカーに代わる自分たちのリーダーは，やはりアメリカの新教育運動を代表するほどの人物でなければならなかったのである。つまり，パーカーの後任にはシカゴ大学教育学部を全米の初等教育改革のメッカとするにふさわしい象徴的な人物が必要だったわけで，その人物はデューイ以外には考えられなかったのである。

第2に，デューイとパーカーは互いにほとんど類似した教育思想のもち主であると周囲から見なされていた事情がある。実際，デューイはパーカーの業績を非常に高く評価しており，実験学校開設以前の一時期に自分の二人の子どもをクック郡師範学校の附属実習学校に入学させている[85]。さらに，彼はパーカー追悼の記念講演でパーカーがアメリカの初等教育の革新に果した偉大な貢献を讃えている[86]。他方，パーカーは自分の業績をきちんと理論化できるのはデューイだけだと見なしていた[87]。そして，クック郡師範学校でデューイに心理学の講義を担当してもらっている。デューイはパーカーの推薦で彼の薫陶を受けたクララ・ミッチェルを実験学校の最初の教師に採用してお

---

[82] Chicago Institute to To whom it may concerne, May 7, 1902.

[83] University of Chicago Board of Trustees to To whom it may concerne, May 20, 1902.

[84] John Dewey to Anita McCormick Blaine, May 21, 1902.

[85] White, op. cit., p. 78.

[86] John Dewey, " In Memoriam: Colonel Francis Wayland Parker," The Middle Works of John Dewey, vol.2, pp.98－101.

[87] Ida B. DePencier, The History of Laboratory Schools, The University of Chicago, 1896－1965 (Chieago Quadrangle Books, 1967), p. 18.

り，またパーカーの右腕で教員スタッフのまとめ役でもあったジャックマンをシカゴ大学教育学科の非常勤講師に採用している[88]。さらに，実現はしなかったけれども，デューイは実験学校に幼稚園部門を新設する際，やはりパーカーのもとで教師をしていたフローラ・クックに委ねたいと申し入れたことがある。そのほかのシカゴ学院の主だった教師もデューイと直接面識があり[89]，そうした関係で，シカゴ学院の教員スタッフは以前からデューイに対して親近感をもっていたことは確かであり，パーカーの後任にデューイを選ぶことに彼らはほとんど違和感をもたなかったであろう。

第3に，ハーパー学長の意向がブレイン夫人を介して教育学部の教員スタッフによる後任学部長選びに多少とも影響を与えたように思われる。旧シカゴ学院理事会にはブレイン夫人とともにハーパー学長もメンバーとして参加しており，理事会がデューイとジャックマンのいずれを後任学部長に指名すべきかについて，教育学部の教員スタッフの意向を打診するようブレイン夫人に求めた際，彼女はデューイを学部長（director）に，ジャックマンを主幹（dean）にするという提案を携えて教員スタッフとの協議に出向いている。おそらくは，この提案とひきかえに教育学部と旧シカゴ学院の独立性を保障することがハーパー学長からブレイン夫人に事前に約束されていたものと思われる。一種の妥協であろう。5月2日付でエミリー・ライス嬢がブレイン夫人に書き送った教育学部教員スタッフとの協議内容のメモでは，協議の中心はもっぱらデューイのもとで教育学部の独立性が保障されるのかどうかに向けられている。そして，5月5日，ブレイン夫人は「当分の間はパーカー大佐が進めてきた路線に沿って活動できる自由を確保できた」という報告とともに，デューイを学部長に，ジャックマンを主幹にすることを教員スタッフは決めたと理事会に報告している。

ハーパー学長にしてみれば，パーカーの後任の教育学部長にはジャックマンよりもデューイのほうが適任だったのである。デューイが教育学部長になれば，彼が主任を努める大学本体の教育学科とパーカーが指揮してきた旧シカゴ学院の教育学部という二重組織が解消され，これまでパーカーが監督してきた附属小学校とデューイが監督してきた実験学校および附属中等学校（旧サウスサイド・アカデミーと旧シカゴ手工学校）もデューイのもとで初等・中等一貫校に統合する見通しがたつことになる。他方，ジャックマンはクック郡師範学校以来，常にパーカーの側近として仕事をしてきた人物であり，教育学部を大学本体に組み入れることには反対の立場であった。彼は，教育学

---

[88] ジャックマンは，1898年秋学期に「授業に関する応用心理学」(Psychology Applied to Teaching)を，1899年冬学期に「実践教育学」(Practical Pedagogy) を，そして1899年春学期に「教授方法発達史」を担当している。いずれもシニア・カレッジ・コース（学部3・4年生課程）の科目である。*The Annual Register, The University of Chicago: July* 1897- *July* 1898 (Chicago: The University of Chicago Press, 1899), p. 178.

[89] 生前，パーカーがデューイに書き送った教育学部の教員名簿の原案の中で，パーカーはジャックマン，エミリー・ライス，アッシュルマン，グッドリッチ，フローラ・クック，クララ・ミッチェルの各人物については「貴君もよく知っている」と付記している。Francis Wayland Parker to John Dewey, February 9, 1901. ちなみに、エミリー・ライスは歴史・文学の教師。アッシュルマンはフランス語の教師で，1898年から2年間ほどデューイの実験学校で教えていたことがある。グッドリッチは音楽の教師。

部を大学本体とは別個の独立性の強い専門学部（professional school）として維持したいと考えていたのであり，教育学部をいわばシカゴ学院のような教員養成専門学校にしたままでシカゴ大学の一員に加わり，その恩恵に浴することを考えていたわけである。これに対して，ハーパー学長はパーカーの死去を契機に，教育学部を大学本体に組み入れ，シカゴ大学に幼稚園から大学院に至る一貫した公教育のモデル・システムを作り上げるとともに，初等，中等およびカレッジ向けの教員養成にも取り組む体制を確立したいと考えていた。

だから，デューイが教育学部長に就任しながら，実際の教育学部の管理運営にあたってはジャックマンを主幹とする教員スタッフ全員による意思決定が尊重される体制がとられ，当分の間は故パーカーの路線，つまり初等教員養成の専門学校の体制がそのまま維持されることになったのは，ハーパー学長と旧シカゴ学院側との間の一種の妥協の産物であったであろう。

しかしながら，教育学部長に就任後，デューイはハーパー学長の構想に沿う形で，教育学部の改革に乗り出していく。そして，ジャックマンをはじめとする教育学部の教員スタッフとの間で次第に軋轢を増していく。にもかかわらず，ハーパー学長からは教育学部の運営に関して十分な協力が得られないことに不信感をつのらせて，デューイはついにシカゴ大学を辞任することになるのである。